

〈研究ノート〉

観光の真正性についての一考察

——金門島における中国人インバウンドの事例から——

林 涛

はじめに

2019年7月6日に開かれるユネスコ世界遺産委員会で、大阪府の「百舌鳥・古市古墳群」は世界文化遺産として正式に登録された⁽¹⁾。令和初となる世界遺産だが、その登録基準の一つとして、「真正性」があげられている。日本ユネスコ協会連盟によると、「世界遺産の登録基準」に、「世界遺産リストに登録されるためには、『世界遺産条約履行のための作業指針』で示されている登録基準のいずれか一つ以上に合致するとともに、真正性（オーセンティシティ）や完全性（インテグリティ）の条件を満たし、締約国の国内法によって、適切な保護管理体制がとられていることが必要」という文言がある⁽²⁾。しかし、2013年に大阪府知事松井一郎氏が「仁徳天皇古墳をイルミネーションで飾って、中を見学できるようにしよう」という発言で世界遺産登録要件である「真正性」を理解していないことを露呈していた⁽³⁾。

真正性（オーセンティシティ）の英文表記 Authenticity は、「権威者」或いは「手作りのもの」という意味をもつギリシャ語の Authentēs から由来している。辞書『Webster's ninth New Collegiate Dictionary』の説明

*本稿は、日本観光学会2019年度全国大会（2019年6月8日、立教大学）にて発表した内容をもとに執筆したものである。本稿で言及されている「中国」、「中国人インバウンド」は政治的な意味はなく、中国大陸または中国大陸出身の観光客のことを指す。（文中的“中国”指的是中国大陆地区，并无政治意义）

(1) 毎日新聞、2019年7月6日記事「百舌鳥・古市古墳群を世界遺産登録 ユネスコ 自然遺産含め23件目」。

(2) 日本ユネスコ協会連盟HP、「世界遺産の登録基準」<https://www.unesco.or.jp/activities/isan/decides/>（2019年9月20日）

(3) 読売新聞、2013年9月7日記事、「世界遺産へ 仁徳陵に電飾を 松井氏」。

によると、Authenticityはoriginal（オリジナル）、real（リアル）、trustworthy（信用できる）という三つの意味が含まれる（張2017：127）。観光における観光資源の「真正性」は、1960年代にブーアスティンの著作『幻影の時代』で初めて提出された。ブーアスティンは、交通手段の発達や観光業者の介入により旅行が便利なものになるにつれて、観光客は原物よりもイメージに基づいた「偽物」に満足し、現実とは異なる「偽物」としての「疑似イベント」を体験するようになったと論じた。この論点に対して、1970年代、マキヤーネルは著作の中で反論した。マキヤーネルは、「本物」か「偽物」かより、いかに「本物らしい」かが重要であると論じ、「演出された真正性」という概念を導入した。それ以来、長い間観光人類学や観光社会学において、観光の「真正性」は非常に基礎的かつ重要な概念として広く共有されてきた。

「真正性」に関する研究は、「観光対象」が本物かどうかの議論から、「観光体験」が本物かどうかの議論へと移行した。吉見俊也は観光産業の変容により、「本物」の体験は「偽物」の体験への墮落と捉えるのではなく、観光客の身体や現実感の変化の問題として考察すべきであると提示した（吉見1996:24-31）。このように観光の資源や体験の真偽に関する研究は、第一段階の「客観的真正性論」と呼ばれている。第二段階になると、コーエンを代表とする研究者たちは、構築される真正性の概念を提示した。観光者の需要に迎合するために作られた「偽物」や「疑似体験」は、時間が経つにつれて、「本物」や「本当の体験」になると論じた。真正性は、あくまでもホスト側とゲスト側の間関係によって生産されたものであるといった、第二段階の研究は「構築主義真正性論」と呼ばれている。その後、第三段階の真正性論の代表的研究として、ディズニーランドに対して盛んに行なわれた。ディズニーランドに訪れる観光客は目の前にあるパレードなどの幻想的なシーンに関して、真正性がないものを認知したうえで、観光を楽しんでいる。観光客はもはや観光対象や観光体験の本物かどうかに関心を持たず、観光の過程で得る満足感だけに拘るようになった。この段階の研究は「実存的真正性論」と呼ばれている。

本研究は中国人観光客からのまなざし、金門住民また台湾本島からのゲスト側としてのまなざしに研究の重点を置き、金門観光資源の背後に見え

表1 観光の真正性の主な分類

分類	客観的真正性論 (Objective Authenticity)	構築主義的真正性論 (Constructive Authenticity)	実存的真正性論 (Existential Authenticity)
拘りの対象	本物の観光資源	本物の観光体験	自分の本当の気持ち
注目点	疑似イベント、舞台の真正性、文化の商業化	観光客の期待、ゲストとホストの関係、真正性の形成	ポスト真正性、真正性の再生産
代表的な研究者	Boorstihin, MacCannell, Taylor, Greenwood等	Cohen, Moscardo, Pearce等	Brown, Grunewald, Wang等
主な論点	真正性は観光資源の固有特徴であり、量的標準で評価できる	真正性は絶対的なものではなく、構築されたものである。ゲストとホストの間の関係の産物である。	観光資源の真正性は必ずしも必要ではない、観光主体に意味があれば、真正性があると認める。

(張：2017に基づいて作成)

る「観光の真正性」の構築についての課題を提示した。さらに、立場の違いから生じる「観光の真正性」をめぐる対立を分析し、「観光の真正性」の判断基準の側面から現在の「真正性」概念をより豊富にする目的である。本研究は「実存的真正性論」の真正性不必要論に賛同できず、真正性の重要性を認めたくえて、真正性の上の次元にもっと重要なものがあるという見方に賛同している。観光の現場の事情を重視し、地域性また観光交流との関係で「真正性」を判断する必要性について議論してみた。また、現存の「実存的真正性論」を補完する研究意義があると考えている。

本研究の調査対象である金門島は中台関係（兩岸関係）において、いろいろな意味で非常に特殊な位置づけとされている。金門島は中国福建省から至近距離にあるものの、中国との政治政権が異なる。金門島はかつて蒋介石が率いる国民党と毛沢東が率いる共産党による中国内戦の最前線であり、長い間「冷戦の島」と呼ばれてきた。かつて戦争時の遺跡は島の全

体の至る所に分布しており、現在「戦地観光」というテーマを構成する貴重な観光資源となっている。2016年蔡英文民進党政権の発足以来、台湾は中国の一部であるという中国政府が主張する原則を受け入れないという姿勢を保持してきた。そのため、訪台する中国人観光客が激減し、観光業は大幅な減収となっている。しかし、台湾本島の観光業従事者が悲鳴を上げている中、台湾管轄下の離島である金門島に訪れる中国人観光客は奇跡的に大幅増を遂げている。このような歴然とした差を生じる理由に問題意識して、金門における中国人インバウンドについての研究に至ることになった。

金門に関する研究は近年「金門学」の確立とともに、地域研究の絶好な事例として広く注目を集めている。特殊な立地、壮大な軍事史、保存度の高い民俗文化、完成度の高い「僑郷」文化、どれも金門研究への有力なキーワードとして使われている。愛知大学も厦門大学、金門国立大学などの海外大学と連携して、金門研究プロジェクトを立ち上げ、研究成果を出しつつある段階である。金門の観光客に対する研究について、マスコミには取り上げられることはあるが、研究論文としてはまだ少ない現状である。本稿は2019年3月、筆者は中国人向けの団体ツアーに参加して、参与観察の方法、また中国人観光客、中国人添乗ガイド、金門島地元ガイド、観光バスガイド、観光産業に携わる金門の住民たち、計10名へのインタビューに基づいて作成したものである。

本稿で取り扱っている中国人観光客の金門観光は、目下注目されつつある「ボーダーツーリズム」の範疇に属している。「ボーダーツーリズム」という言葉はここ数年でいろいろな場所で語られるようになってきた。『現代用語の基礎知識2016』に「時代・流行」の世相語として取り上げられるまでになった(現代用語の基礎知識2016:1082)。「ボーダーツーリズム」項目に「国境・境界観光。国境を挟む境界地域を『交流の最前線』と位置づけ、観光を通じて関心を高める試みを九州大学や北海道大学の研究者によって行われている」との説明文がある。「国境観光」という言葉もよく使われるが、両サイドの政治的な見解の違いへの考慮から、「ボーダーツーリズム」というより客観性がある言葉を使いたいと考える。本研究はこの「ボーダーツーリズム」という文脈のなかに金門島が直面する課題を提示し、「ボーダー」の両サイドから見る「観光の真正性」の違いについても

検討してみた。

I 調査地金門島の概況

金門島とは正式には大金門島、小金門島をはじめとする、大小12からなる島嶼の総称である。面積は152平方キロメートル（大阪府で敷地面積が第2位の堺市とほぼ同じ⁽⁴⁾）で、戸籍上の人口は137,456人（金門県政府主計処2017：22）だが、実際に島に常住している人口は9万人未満（佐藤2018：15）である。金門戸籍は税制面での優遇があるため、戸籍を金門に置いて、日常的には台湾本島に暮らしている住民が多いことが分かっている。長年軍事拠点の役割を果たしてきたので、資本投資ができず、工業は発達していない。水不足のため、乾地でも成長可能な高粱が盛んに栽培され、有名な土産品として「金門高粱酒」があり、主な産業は観光業である。地図上で見れば分かるように、台湾本島から西へ270キロ離れたところに位置するが、中国の廈門市からはわずか2キロしか離れていない（松本



図1 金門島の位置図

出典：（松本2013：29）

(4) 大阪府堺市市役所HP、堺市プロフィールページ、面積は149.82平方キロメートルと表示される。https://www.city.sakai.lg.jp/shisei/tokei/suikei.html（2019年6月30日）

2013:29)。廈門市の五通埠頭からはフェリーで30分と短時間で着くので、中国人特に福建省出身の住民には非常に人気がある観光地である。

2001年に中台間「小三通」(通航、通商、通信の限定的解禁)の実験場所として脚光を浴びていた。2018年、金門島に訪れる中国本土観光客は25万人を突破し、台湾本島からの観光客数の23万人をはじめて超えた⁽⁵⁾。また、下記図2からは中国本土から台湾本島に訪れる観光客が激減しているなか、金門などの離島地域に訪れる観光客は急増している様子が伺える。

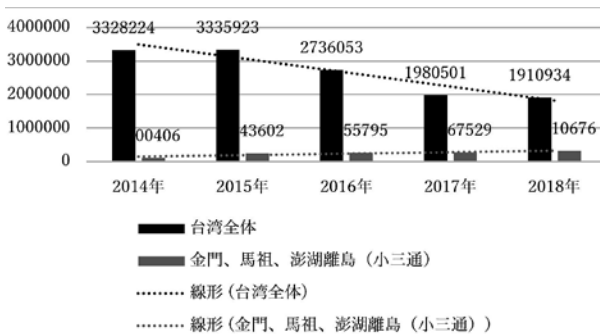


図2 2014-2018年台湾に訪れる中国本土からの観光客述べ人数推移⁽⁶⁾

(筆者作成)

II 金門島観光から見る「真正性」をめぐる齟齬

金門島は「戦地観光」というテーマで現段階ではまだ台湾本島と中国大陸の両方から人気を呼んでいるが、実際1992年観光解禁して20年以上経っている現在、すでに「リピーター確保難」という戦地観光の共通の課題に直面していることは、筆者は金門現地の観光業に携わる方々への取材でよ

(5) 金門県政府広報記事「純金遊人数倍増、首度出現陸客多於台客」。https://www.kinmen.gov.tw/News_Content2.aspx?n=98E3CA7358C89100 & sms=BF7D6D478B935644& s=F509CDCCF8B4ED85 (2019年8月23日)

(6) 台湾内政部移民署発表したデータに基づいて作成した。金門、馬祖、澎湖の三つの離島の中では、金門に訪れる観光客数はダントツ1位の25万人(2018年)である。

く耳にする懸念材料である。戦争時の物資を運搬する翟山坑道で閉鎖的な空間を利用して「坑道コンサート」を開催したりするなどのリピーター確保への取り組み策があるが、若者の間、特に「90後」、「00後」と呼ばれる若者達は、かつての戦争地への関心が薄くなる一方である。そこで、金門県観光処は「金門は失われつつある中華文明の生きた化石である」とアピールし続けてきた。長い歴史の中、金門島は戦地とされる期間はせいぜい50年しかない、金門本来の文化資源こそ金門の魅力を再発見すべき資源であると認識してきた。

しかし、筆者は中国人観光客への聞き取り調査、及び自分の参与観察で確認したところ、買い物目的で金門を訪れる中国人観光客が、高い割合を占めているようである。特に若い女性の間では、大陸側ではなかなか手に入らないブランド品を金門の免税店で買うために来ている傾向が強い。日本ではすでに消えたと言われている中国人観光客の「爆買い」は2019年時点、金門島では未だに健在している。日本では日本の商品しか買い求めることができない事に対して、金門では金門地元産や、台湾本島産だけではなく、日系薬局が進出してきた店で日本製の化粧品、医薬品まで買うことができるメリットがある。日本国内で購入する製品にはない中国語での表記があるので、非常に便利で好評である。特に、所要時間が30分のシャトル船で着く場所にあるため、台湾産、日本産日用品の購買代理を行う廈門在住の人達は珍しい存在ではないようである。筆者も実際に妊娠後期の購買代理の女性を見かけており、この光景は商売の手軽さを物語っている。また、人数分の購入数の制限があるため、参加したツアーの廈門側ガイドと金門側ガイドからは金門への出入りする際、免税煙草「セブンスター」の携帯を頼まれた。

金門地元住民が自慢とする建築などの保存状態がいい「中華文明」、即ち「真正の中国性」を売り込もうとするが、中国人観光客には通用しない。彼らは、金門はあくまでも台湾管轄下の一部であり、「中国性」ではなく、「真正の台湾性」を求めている。特に、半数以上占めている福建省出身の観光客にとって物珍しくない「閩南家屋群」の売り込みは認識の齟齬が生じている。観光客は常に非日常的な体験を求める傾向がある。例えば、パッケージに毛沢東の顔が入る「毛沢東ミルクティー」が中国本土では見ない

ので、中国本土からの観光客には大人気である。このような現象は観光産業の企画の中で、非常に普遍性がある事象だと考えられる。例えば、沖縄の八重山諸島に訪れる台湾人観光客の間でも確認できる。研究者上水流久彦の調査では、八重山諸島の観光業者は「八重山ならではの離島文化」をアピールしようと、「ソーキそばは、いかがですか?」と声を掛けるが、台湾人観光客からは「いや、日本のラーメンが食べたい」との返事が返ってくるワンシーンが書かれている(上水流2013)。八重山諸島も台湾人観光客から「日本の一部である」と見られ、「真正の日本性」を求められている。

また、筆者はもう一つ気づきにくい点から認識の齟齬を提示させて頂く。筆者は金門調査をする前に、数多くの旅行記をチェックしてみたところ、若い中国人観光客の間に、秘かに「漢服を着て金門を歩く」という流行が存在していることが分かった。実際調査中に金門の国家公園内のカフェで「漢服撮影」を楽しむ中国人観光客の姿が確認できた。2003年、中国人王楽天氏が初めて漢民族の伝統服「漢服」を着て街を歩いたことが大きな議論を呼んでいる。その後、若者の間でコスプレや、民族の復興などの目的で漢服ブームになっている。そしてこのブームは現在も継続中である。中国の検索最大手「百度」の「漢服コミュニティ」だけでも会員数は50万突破している。2007年、中国の政治協商委員(議員相当)は「漢服」を「国服」にする提案を中央政府に提示した⁽⁷⁾。また、卒業式の集合写真を漢服で撮る高校、大学が続出した。「漢服運動」について、中国では「民族の復興のための正のパワー」と「インターネット発の民族主義の負のパワー」との見方が分かれている。

中国人観光客の「漢服撮影」について、金門住民に聞いてみたところ、「金門は長年の軍事基地役割のお陰で、中国で破壊されつつある伝統文化が大変よく保存されているので、漢服の撮影に向いている」という歓迎の声がたくさん聞こえてくる。しかし、漢服を着て金門を歩く人のなかに、「金門あるいは台湾は中華文化の必要不可欠の一部、即ち台湾は中国の一部である」という政治的発言をする目的で来ている漢服愛好家も多くいることも事実である。彼らにとっては、漢服を着て金門を歩くことは、兩岸

(7) 百度百科、「漢服運動」項目の解説に基づいて編集した。

に共有できる中華文化のアピールができる行動なのである。似たような事象だが、同様の立場で対馬を訪れる韓国人観光客も多くいる。金門住民が主張する「金門ならではのオーセンティシティ」と一部の漢服愛好者が求める「中華文明の構成部分である金門のオーセンティシティ」の間の認識のずれが確認できる。これも前文で提示した認識の齟齬と同じ、金門の特殊な場所（政治的位置づけ）が前提条件となっている。

Ⅲ 獅山防塞からみる「観光の真正性」とまなざし

先行研究の節にも提示したが、「演出された真正性」という概念がマキャネルによって導入された。観光の現場では、「演出」とりわけ「パフォーマンス」は「観光の真正性」を検証する重要な場でもある。観光人類学者橋本和也はフィジーの火渡りパフォーマンスに関して、もともと限られた祝日だけに大きな広場で披露するダンスだが、観光客の需要によって、いつでも実施できるように、観光客が一番身近な存在であるカルチュ



写真1 人気スポット獅山防塞

(写真出所：金門県政府観光処⁽⁸⁾)

(8) 金門県政府観光処 <https://kinmen.travel/ja/travel/top-ten> (2019年6月29日)

ラルセンター或いはホテルの中で演じられるようになったと検証してきた(橋本1999:258)。曾士才は中国の少数民族苗族のダンスにも注目してきた。西洋人観光客を満足させるために伝統の生活様式を変えた商業的なイベントになったとの批判があると指摘した(曾2001:87-105)。利益優先の為に演出の時間や場所が変更されることや、またそもそもなかった演出を外から取り入れているということ、「真正性」への影響事例として挙げている。

本稿で着目している事例は「獅山防塞」というスポットでのパフォーマンスである。獅山防塞は金門県観光処に観光スポットトップ10の7位にランキングされている人気スポットである。この砲台は1958年に建設が始まり、1959年に完成した。主な目的は1958年8・23砲戦で威力を発揮した大型カノン砲の展示、共産党軍への軍事力顕示である。8・23砲戦は廈門と金門の間で44日も続いた。その際、47万発以上の砲弾が金門に投げられたとされている。のちに展示対象になったこのカノン砲はアメリカからの提供品で、一回の爆発範囲はサッカー場三つ以上に及ぶという。当時の共産党軍は国際向けで、原子爆弾攻撃を受けたと抗議した。この兵器の投入で、8・23砲戦に終止符を打った。

2010年に金門県は軍部から獅山防塞の管理権を譲り受けた。その後、展示博物館に改修する方針で決まった。当初、改築に手掛けた台湾人デザイナー王柏仁氏のHPによると、「いざという時の戦闘の即戦力への切り替えも考慮した」という⁽⁹⁾。2011年8月1日から観光開放以来、累計126万人の観光客が訪れた。平均で毎年訪問観光客数20万人以上に上っている。2017年の乗客数は248,478人であった⁽¹⁰⁾。しかも、年々増加傾向である。中国大陸からの観光客はメインとなる客層である。主な観光内容は訓練演出、兵器展示、防塞施設見学、動画紹介、パソコンによる砲撃体験などである。そのなかでも、筆者が注目しているのは蒋介石との合成写真撮影サービスである。当時金門に訪れた蒋介石が、第一線の駐在軍兵士と握手を交

(9) 王柏仁氏のHP: <http://wangpejen.com/work/%e7%8d%85%e5%b1%b1%e7%a0%b2%e9%99%a3%e5%9c%b0/> (2019年6月29日)

(10) データ出所: 金門県政府HP掲載記事「獅山砲陣地重規劃 營造亮點」https://www.kinmen.gov.tw/News_Content2.aspx?n=98E3CA7358C89100 & sms=BF7D6D478B935644 & s=C14A82B9AEBDE065 (2019年6月29日)

わしているという場面の写真に、観光客の顔を兵士に合成することで、蒋介石と握手している合成写真ができる。このサービスが、中国大陸出身の観光客から人気を呼んでいる。

また本稿性質上、筆者が一番注目したのは獅山防塞観光の目玉の訓練の演出である。こちらのパフォーマンスが登場して以来、来客数が激増したと言われている。演出の所要時間は約20分、一日6回、一時間おきに実施されている。演出は金門島の駐在軍隊から教えてもらい、現在金門住民を中心に実施されている。筆者は実際に金門での観光調査を行う前に、主要旅行サイトで観光スポットの口コミを概ねチェックした。そこでこの訓練演出はネット上大きく物議を醸していることに気づいた。観光地のゲスト側、即ち金門住民の間、また一部の台湾本島からの観光客の間では、演出の俳優メンバーの構成に問題視をしている。一回の演出は8名の俳優を使用しているが、その俳優は殆ど女性である。筆者が訪れた日には8名のうち、男性は一名のみであった。かつて戦争時、砲台で訓練を受けていた兵士は全員男性であった。確かに、女性による演出は男性に比べたら、迫力がなく、戦争時の緊迫的な雰囲気も台無しになったという感想は口コミサイトでも確認できる。しかし、このスポットは一番問題視とされているのが、俳優陣の性別ではなく、7名の女性のうち、半数に近い3名はなんと中国大陸からの女性だという点である。金門島の観光口コミサイトの「金門戦役史跡論壇部落⁽¹¹⁾」では、「最近は従業員にまで中国本土から嫁いできた女性がいることで、笑いものになるのでは」と台湾本島の観光客から酷評されている。

隊長の石成梅さんは四川省宜賓市出身で、獅山防塞で演出して6年になる元老的な存在である。隊員の前で強烈な四川訛りで訓話するとき、台湾人観光客から「何を言っているか全く聞き取れない」との声もある。高粱酒が有名な金門島では、自己紹介では、よく「自分は中国ではあの有名な五糧液の産地から来た」と言うという。たまに四川からの観光客に声をかけるときもあるという。石成梅さん以外に、福建省出身の隊員が2名在籍

(11) サイト「金門戦役史跡論壇部落」<http://ttt0920.pixnet.net/blog/post/99711823-%E7%8D%85%E5%B1%B1%E7%A0%B2%E9%99%A3%E5%9C%B0%28%E4%B8%80%29---%E9%9C%87%E6%9D%B1%E5%9D%91%E9%81%93> (2019年6月29日)

している。3人とも、中国本土から金門島に嫁いできた「大陸花嫁」である。

観光資源の「真正性」の角度から見れば、確かにこのパフォーマンスの俳優陣構成は「真正性」を著しく破壊したとも言える。「大陸出身者がかつて大陸に向けての砲弾発射の再現を、大陸からの観光客の前で披露している」という事実についてどうしても受け入れられないという意見が続出してきた。この角度から見れば、ゲスト側、また台湾本島からの観光客の非難必至も理解できなくはない。しかし、筆者の調査で、その大陸側出身女性を投入するまでのやむを得ない裏事情が明らかになった。この演出は2011年当初、金門大学の男子大学生によって披露されていたが、やはり一日6回という頻度で学生の学業に影響するという理由で学生による披露は廃止した。また、俳優への報酬はコスト採算で当初から時給制を取っており限られた収入のため、男性は敬遠しがちの仕事でもある。さらに、砲台は人工で掘った洞窟の中にあるため、天井から度々石が落ちてくるので、実は怪我をしやすい「3k」仕事でもある。その上、人員の出入りが激しく、新たに新人を採用しても、一定期間の訓練が必要で、すぐには投入できない問題も悩ましい。筆者が金門県政府HP掲載の過去の情報を調べたが、人員異動で獅山防塞の演出をやむを得ず中止するというニュースがあった。「給料を3000元台湾ドルアップしますので、たくさんのお応募お待ちしております。」というスタッフ急募の内容も確認できた⁽¹²⁾。金門島に嫁いできた大陸花嫁の就職難の需要と合致して、このような俳優陣構成になった経緯がある。

観光の真正性は追求する立場によって変わる。獅山防塞のパフォーマンスはホスト社会(金門地元住民及び台湾本島住民)のこだわりで問題となった。実際、筆者は現場で中国人観光客にインタビューした中で、演出者のなかに大陸花嫁が入っていることには少し驚いていたが、特に問題として認識していないようである。人によっては、親近感さえ感じ取られる場合もあった。実際、大手旅行サイトの「TRIP ADVISOR」の評価を見ると、このパフォーマンスに対して、「良い」と「非常に良い」という評価が84%に上り、残りは「普通」であり、悪い評価が一件もなかった、全体で

(12) 金門県政府HP、お知らせ「獅山防塞演出中止」<https://kinmen.travel/zhtw/news/details/2219> (2019年6月27日)

4.5という高評価を得ている⁽¹³⁾。内容から見れば、若干「迫力に欠ける」などの意見があったものの、全体的にはパフォーマンスは非常に成功した観光スポットであることが分かる。ホスト側が追求する「観光の真正性」の事例はほかに、外国人力士が大活躍する日本の大相撲がある。モンゴル勢を含めた外国人力士が三役を仕切るなか、多くの日本国民の胸中にどこかささやかな悲しい気持ちが秘めている。大横綱白鵬への帰化要求はホスト側のこだわりを物語っている。

そもそも、ゲスト側（観光客）が追求する「観光の真正性」は観光過程のなかで一番の基本であった。観光学者アーリはフーコーの臨床医学で医者患者へのまなざしからヒントを得て、観光客の支配力のあるまなざし論を提示してきた。金銭を出す側としての観光客は、常にホスト側（観光される側）への要求をしてきた、時には理不尽な要求もある。例えば、フランス人観光客はインドネシアの先住民観光地で、提供された飲料のストローは何年前の竹製からプラスチック製に変わったことに怒りを覚えたり（COHEN 2007：943-960）、最先端のアップル社の腕時計をしている少数民族ダンサーを見てショックを受けたりする。中国の雲南省の少数民族の摩梭族は「走婚」と呼ばれる通い婚の習わしを続けてきた「最後の母系社会」として知られている。女性は自分の希望次第、伴侶を選ぶことも、替えることもできる。しかし、摩梭族は現在急速に現代化され、若い世代ではすでに「走婚」を行わなくなってきた。それにも関わらず、摩梭族少女はよく観光客から「今、何人の彼氏と同時につきあっているのか」と言う質問をぶつけられる。それに対して、摩梭族少女は「観光客からの理不尽な要求ばかり、我々は今の時代でも、動物の皮で暖を取り、動物の血を飲めば、あなた達はそれで満足するの」と反論している。観光には「植民地」的なまなざしを注げられることが多かった。

また、ゲスト側とホスト側が両方追求する「観光の真正性」もある。例えば、一部の日本人から、「冬でも浴衣」の外国人観光客を歓迎する京都市には罪がある声が聞こえてくる。この浴衣に関しては、日本人だけでは

(13) 旅行サイト「TRIP ADVISOR」：https://www.tripadvisor.jp/Attraction_Review-g13806656-d6554394-Reviews-Lion_Mountain_Howitz_Park_Museum-Jinsha_Kinmen.html (2019年6月29日)

なく、外国人観光客からも拘りがある。着る時期に対してではなく、目の前に現れる浴衣姿の「日本人女性」の写真を撮ろうとするが、同じ中国語を話していることに気づき、がっかりすることが多いからである。富岡製糸所は世界遺産に登録されたばかりの時、話題性を作るために、ドイツ人ガイドを起用していた。これに関して、地元の日本人住民もよそから来た日本人観光客も違和感を覚えたという。

立場というモノは、常に自分自身または自分が配属されている集団の利益の実現と関係している。パフォーマンスの主体に向けられた「まなざし」も常に権力構造をそのまま反映している。大陸花嫁の演出参加について、猛反対する一部の金門地元住民及び台湾本島からの観光客のなかには、もちろん8・23砲戦の史実との違いから反対している人もいるが、単に「大陸花嫁」というレッテルに過剰に反応している人もいる。後者は恐らく一種の植民地的なまなざしの範疇に入るといえるだろう。観光、特に地元住民のパフォーマンスについて、太田好信は以下のように指摘している。「観光という力の関係に媒介された出会いにおいて、いったん漁民（筆者注：住民とも置き換えられる）が自己を『見物されるモノ』として観光客に提示しながら、本来の力の構造を逆転することを実現する」（太田1992：338）。観光が住民に自分の文化を誇りに思う機会を与えることがよくあるが、獅山防塞の住民によるパフォーマンスに関しては、このような力を逆転するほどの「誇り」を確認できなかった。理由としては、元々男性の軍人による訓練が地元主婦層による再現となり、迫力が欠如していることと、かつて敵視されている「大陸人」が「金門人」の一部として入り込み、大陸への砲戦訓練を演じていること、以上の2点だと考えられる。しかし、記録写真シリーズ「ある中国人の一日」の金門特集の写真取材⁽¹⁴⁾に対して、本稿前文に出た隊長の石成梅さんは、「この仕事に対して自分の出自の文化として誇ることはできないが、『仕事をきちんとやり遂げる』という『誇り』がある」と語っている。

また、大陸の花嫁が参加するパフォーマンスはかつて「冷戦の島」と呼

(14) 記録写真シリーズ「ある中国人の一日」金門特集は獅山防塞の大陸花嫁について取り上げた。https://news.qq.com/original/oneday/2937.html?pgv_ref=aio2015 & ptlang=2052(2019年9月19日)

ばれてきた金門ならではの立ち位置において非常に意味がある事象であり、かつての「対立」から現在の「平和」への転換の象徴でもいえる。撤去させるのではなく、逆に支持すべきと考える。更に、金門社会の多文化共生の象徴とも言える。実際の居住者9万人未満の金門だが、大陸からの花嫁は2400名（金門県政府2018：3）にも上っている。約十分の一の金門男性は大陸出身の女性と結婚している事実のなか、パフォーマンス参加の何名かの大陸花嫁の背後にもいくつもの家庭の生活が関わっている現実的な問題でもある。大陸花嫁の演出参加への問題視は、実質上「金門住民の真正性」をめぐる認識の違いである。反対側の立場からみると、「金門住民は金門生まれ、金門育ち、血縁上の出自も純血の金門ルート」などの要素は「金門住民真正性」の構成部分である。しかし、大陸花嫁を含むよそからの「新住民」の参入は、実質上多様性がある「現在の金門住民」のあり様を忠実に反映した結果になる。1980年代以降、E・ホブスボウムとT・レンジャーは「伝統の発明」という議論を展開した。また、コーエンは時間の経過とともに非真正的なものも真正性を帯びるようになるという「創発的な真正性」という概念を提起した。大陸花嫁のような「新住民」も時間の経過とともに、次第に認められる時が訪れるであろうことから、「新住民」を含めた「今の金門住民」による「過去の金門住民」の演出再現への問題視も自然になくなるだろうと考えられる。

大陸花嫁の演出者の投入からはゲスト側の冷ややかなまなざしを確認できるが、実際にこのパフォーマンスからは観光客へのまなざし、そして台湾本島から金門へのまなざしまで確認できる。パフォーマンスの準備段階で、限られたスペースに大勢の観光客が入り込んでくるので、演出実施のスペースの確保から一苦労すると筆者が見ている。この観光客の立ち位置の整理には、非常に興味深いワンシーンが起きる。あまりにも多くの観光客で、演出するスペースがなかなか取れないなか、一人の台湾本島からの女性ツアーガイドが苛立ちを抑えきれず、中国人観光客に向かって、大声で「下がれ！ お前ら、こんな簡単なルールも分からないのか」と怒り出した。また演出実施の金門側スタッフにも「お前ら、本当に使えないね」というような顔で現場の整理をし始めた。恐らく、中国人観光客からも金門地元住民からも非常に横柄な態度を感じ取られるワンシーンである。

金門と台湾本島の関係も今回の観光調査の一部であり、金門出身のツアーガイドの蔡さんに話を伺った。「台湾本島、シンガポール、マレーシアなどからの観光客は中国本土からの観光客と比べたら、ゆっくり観光する意欲が強く、一日平均二つのスポットしか回わさないようにしている。でもいろいろな厳しい注文が来る。中国大陸からの観光客からは大体尊敬の目で見られる事に対して、これらの地域からの観光客からは上からの目線で見られている。所詮、彼らから見れば、我々は『大陸人』にすぎない」との憤慨の声も聞き取れた。離島の金門は台湾本島政府から「辺縁化」(周縁化)される心配の声をたくさん拾えた調査であった。

おわりに

本稿では、主に「観光の真正性」というアプローチから金門に訪れる中国人観光客を取り巻くいくつかの事象を調査分析してみた。戦地観光の限界を見出した金門政府は「真の中華文明」を打ち出したが、中国人観光客の「真の台湾性」を求める需要との食い違いが見られる。獅山防塞のパフォーマンスは台湾本島のゲスト側、金門地元のゲスト側、そして中国本土からのゲスト側の三者の微妙な関係を凝縮したとも言える学術研究の絶好の場だと認識している。当初、ネットでの議論に気づき、今の議論のままだと、今後パフォーマンスの存続の危機にもさらされるのではないかとの心配から今回の調査内容に取り入れたが、「観光の真正性」を判断する基準を考えさせられることになった。

本稿は「実存的真正性論」に概ね賛同している。観光資源の真正性はもちろん重要だが、単に真正性を追求することだけでは不十分である。今の「偽物」ができる背後の事情も調査すべきである。また、「偽物」も歓迎されるとすべき場合がある。マキヤーネルの「演出された真正性」の理論から見れば、現状の「迫力不足」の問題をクリアして、もっと本物らしく演技れば、「観光の真正性」の道も十分開けられると考える。「観光の真正性」の判断基準は、定義の「オリジナル」、「リアル」、「信憑性」の三点を満たしているかどうか以外、「いい観光交流に促進できるかどうか」、「観光交流で互いにいい影響を与えるかどうか」という内容を加えることも必要で

はないかと考える。本稿で取り上げた獅山防塞のパフォーマンスに関して、地元出身の演出者はすぐに辞めていく事に対して、隊長の石さんは6年もこの仕事を続けてきた。現在は大陸の花嫁がいなければ、絶大な人気を呼んでいるこのパフォーマンスは成り立たないと考えられる。

本研究で提示する「観光の促進ができるかどうか」は観光資源の消滅を回避でき、更なる観光の発展に繋がるかどうかという意味合いである。獅山防塞のパフォーマンスは金門の観光事業にも、中国本土からの観光客の金門文化への理解にも非常にいい影響を与え、更には過去の「冷戦の島」というイメージを払拭し、「平和的な最前線」というイメージづくりに貢献している。また、金門住民も観光産業の拡大で確実に経済が発展した。また、本研究で提示する「観光交流で互いにいい影響を与えるかどうか」は、互いに経済や文化の面でメリットをもたらし、持続可能な観光業にできるかどうかという意味合いである。「真正性」の議論に足を引っ張られることなく、「真正性」の上の次元にある「観光の意義」についての意識を更に高めていく必要がある。我々は観光活動、特に国際観光は、文化交流の役割があると見てきたが、実際観光のゲスト側とホスト側が接触する前の準備段階では、すでに文化の交流が始まっていることに気づかない。これこそ、観光事業の醍醐味であると本稿は提示したい。

アメリカとメキシコの国境を研究するマルチネスは、境界地域の交流に関して、「疎外(alienated)」、「共存(coexistent)」、「相互依存(interdependent)」、「統合(integrated)」の四つのモデルに分類されている(古川2017:163)。金門島に関して、2019年時点での状況はかつての「疎外」を卒業して、現在「共存」と「相互依存」の間の段階に来ていると考える。今後、「相互依存」また「統合」の段階に切り替える可能性としては否定できない。(ここでの「統合」は政治的な意味の統一ではなく、マレーシアとシンガポールの間に位置するジョホールバルのように、往復500円の路線バスを利用すれば自由に往来できる状況を指す。)[「ボーダーツーリズム」には、重要な要素が三つある。①見る②渡る③併せ見る(島田2017:105)。③番の併せ見ることは研究において一番重要ではないかと考える。例えば、1958年の金門砲戦について、金門側の記念館と厦門側の記念館を併せて見れば、わずか2キロの距離しかないのだが、その真逆の見解に見学者は驚くだろう。要は、「観光の真正性」

についても、「ボーダー」の両サイドからの違いを「併せて理解する」必要があるということだ。

本稿は今後更に加熱すると思われる日本の「ボーダーツーリズム」研究に、参考となる素材を少しでも提供できたらと思う所存である。

参考文献

一、日本語文献

- 太田好信 (1992) 「沖縄・八重山の『ウミンチュ体験コース』考」『中央公論』8月号 中央公論新社、333-339頁。
- 岡本亮輔・金成攻・周倩編 (2017) 『東アジア観光学』亜紀書房。
- 上水流久彦 (2011) 「『周辺』にみる国民国家の拘束性 台湾人の八重山観光を通して」『北東アジア研究』20 鳥根県立大学北東アジア地域研究センター、51-66頁。
- 『現代用語の基礎知識2016』(2016) 自由国民社。
- 佐藤元彦 (2018) 「島嶼学と金門島」『愛知大学国際問題研究所紀要』152号、1-22頁。
- 島田龍 (2017) 「沖縄・八重山と台湾への挑戦」岩下明裕編著『ボーダーツーリズム 観光で地域をつくる』北海道大学出版会。
- ジョン・アーリ/ヨナス・ラスン (2014) 『観光のまなざし』法政大学出版局。
- 曾士才 (2001) 「中国における民族観光の創出 貴州省の事例から」『民族学研究』66・1、87-105頁。
- 橋本和也 (1999) 『観光人類学の戦略 文化の売り方・売られ方』世界思想社。
- ブーアスティン (1964) 『幻影の時代 マスコミが製造する事実』星野郁美・後藤和彦訳 東京創元社。
- 古川浩司 (2017) 「ボーダーツーリズムが問いかけるもの」岩下明裕編著『ボーダーツーリズム 観光で地域をつくる』北海道大学出版会。
- 松本はる香 (2013) 「金門島—中国と台湾のかつての前哨戦の地 (フォトエッセイ)」『アジア研ワールド・トレンド』217巻 日本貿易振興機構アジア経済研究所、29頁。
- 吉見俊哉 (1996) 「観光の誕生——疑似イベント論を超えて」山下晋司編『観光人類学』新曜社

二、中国語文献

金門県政府主計処編 (2018) 《新住民—人口成長的新動力 金門県 107年統計分析》。

張曉萍 (2017) 《旅遊人類学》中国人民大学出版社。

三、英語文献

COHEN E (2007) Beyond authenticity and commodification. *Annals of tourism research* 34 (4), Wisconsin: Dept. of Habitational Resources, University of Wisconsin at Stout.

关于旅游的“本真性”的反思

——以“陆客”金门游为例——

林 涛

20世纪60年代,历史学者布尔斯廷在其著《镜像:美国伪事件导览》中指出,随着旅游成本的大幅下降和旅游配套设施的改善,人们越来越简单地到达远方旅游,然而随之带来的是,旅游过程中充满了大量的“虚假事件”,比如美国人可以在一个仿造的非洲乐园里体验非洲,而不用再费体力到达真正的非洲。随后70年代,麦坎内尔对此提出了反对意见,认为游客的体验是真还是假并不重要,重要的是是否更加接近于真实。在之后的几十年里,旅游的本真性便成为了旅游研究的一个基本概念,也成为学者之间的共识。世界遗产的评审标准里,也加入了“是否具有本真性”这一依据。本文通过作者参加面对大陆客的金门旅行团的参与观察方法和对金门旅游从业者,当地居民和游客的采访,调查了中国大陆游客在金门旅游过程中,围绕“旅游的本真性”,东道主,游客,以及台湾本岛游客三者之间的各种意见分歧,揭示了不同的立场下,“旅游的本真性”有不同的定义标准,这个常常是旅游过程中各方矛盾产生的原因。

金门从1992年推行“战地旅游”以来,时至今日,随着新生代年轻人对历史的淡漠,越来越难以获取回头客。金门政府试图推销金门的“闽南文化传承者,中华文化活化石”之魅力,然而大陆游客对于金门,往往出于可以轻松体验到台湾文化,购买到台湾商品等目的,也就是说出于对其“台湾特性”的向往,而非其“金门特性”,这个是围绕其本真性的认识上的分歧。同样,穿汉服游金门的大陆游客的初衷,和金门当地居民认为的原因,也有很明显的差距。

本文重点调查了狮山炮阵地中的操练表演。50年代八二三炮战中,美国为金门提供的大炮发挥了巨大威力,重创了对岸厦门,长期以来狮山炮阵地作为显示台方军事力量的展馆而存在。面对旅游业的高速发展,当地引入了操练表演,然而针对这一旅游演出的本真性,从各方面爆出了许多质疑的

呼声。战争时期的男性士兵的训练，演变成了当地家庭主妇为主的形式性演出，在气势魄力上大打折扣。更加让许多台湾本岛游客，以及金门当地居民不满的是，家庭主妇队伍中近半是嫁入金门的大陆新娘。本来是针对大陆的战备演练，结果变成有半数的大陆新娘来实施，表面上的确存在严重的“虚假事件”的嫌疑。然而，通过作者对大陆新娘参与进来的背后故事的调查，以及对大陆游客的采访，还原了其“本真性”的合理性。同时揭示了不同立场下，对本真性的判断标准也会大相径庭的现象。文章也呼吁，判断旅游本真性是否合理，不应拘泥于事件的真伪，而应该看到即使是“伪事件”，也有存在的必要，应看其是否真正促进了不同文化背景下人们的有益的文化交流。